

初夢譚：光技術のリフレーミング

宇都宮大学 オプティクス教育研究センター

武田光夫

(当協会 光センシング技術部会協力委員，
「光応用技術研修会」及び「現代干渉計測入門」技術講座 講師)

1. はじめに

最近ビジネス心理学などの書物で「リフレーミング (reframing)」という言葉をよく目にする。ウィキペディアによると「リフレーミングとは、ある枠組み (フレーム) で捉えられている物事を、枠組みをはずして違う枠組みで見ることを指す」とある。また、西尾和美著¹⁾「リフレーム 一瞬で変化を起こすカウンセリングの技術」によると、「リフレームの目的は、今までの考えとは違った角度からアプローチしたり、視点を変えたり、焦点をずらしたり、解釈を変えたりと、誰もが潜在的に持っている能力を使って、意図的に自分や相手の生き方を健全なものにし、ポジティブなものにしていくことです」とある。例えば、「転勤で通勤時間が長くなった」という事実を「早起きが面倒で満員電車は疲れる」とネガティブに考えずに「車中での読書や音楽鑑賞の楽しみが増えた」とポジティブに考えるのだという。“There is nothing either good or bad but thinking makes it so (Hamlet)”とシェークスピア²⁾もいう。確かに物事は考え次第である。「リフレーミング」はストレスに満ちた現代社会を生き抜くビジネスマンやビジネスウーマンのための生活の知恵であるが、このような巷で流行っている心理学的方法論としての「リフレーミング」の概念を光技術という異なる視点でリフレーミングしてみるとどうなるか？光工学的的方法論としての「リフレーミング」の新たな可能性が見えてくるのではないかな？

編集部より「新春に夢を語れ」との執筆依頼があった。かつての技術大国日本はいまや熾烈な国際競争の中で困難な局面に立たされている。夢を語るのは難しい。困った。何らかのリフレーミングが必要である。本稿は、筆者の見た初夢、「光技術のリフレーミング」についての新春酔夢譚である。

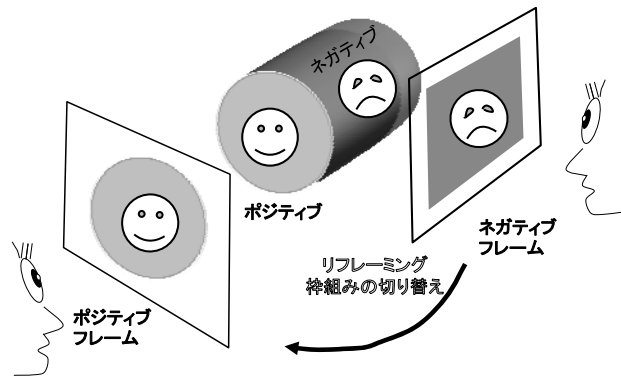


図1 リフレーミング：ネガティブに見えるものでも見るフレーム (枠組み) を切り替えることによりポジティブな面が見えてくる。

2. 光センシングにおけるリフレーミング：困ったことはよいことだ！？

技術開発はある目的をもって行われる。目的の達成の障害になる物理現象があれば、それは「困ったこと」みなされる。一例をあげよう。現在のインターネット社会のインフラを支える光ファイバー技術は減衰や歪なく光信号を高速かつ安定に長距離伝搬させること目的に開発された。初期に問題となった、振動、圧力、温度変化などの外乱や媒質の波長分散による光信号の乱れは、まさに「困ったこと」であり、それらを克服することによって現在の光ファイバー通信が実現した。